

# 「保健医療分野における AI 研究開発加速に向けた人材養成推進委員会」所見

令和 8 年 1 月 3 0 日

## 1. 事業の概要

本プロジェクトは、医療系学部を有する大学を中心に、民間企業・団体等の協力を得ながら、医療現場のニーズ・知見を用いて保健医療分野における AI 研究開発を推進する医療人材を養成する拠点を形成する取組を支援することを目的とする。

## 2. 事後評価で確認できた成果

本委員会では、昨年度に事業の補助期間が終了したことから、取組の実施状況や成果等を検証し、評価結果を各大学にフィードバックすることによる今後の事業の更なる発展や、本事業の成果等をわかりやすく社会に公表することによる成果の普及を目的に最終評価を行った。

教育プログラム・コースの構築状況については、7 大学が連携し 9 の教育プログラム・コースを設け、令和 2 年度から令和 6 年度の期間において、正規課程 611 名、インテンシブコース 2,649 名を受け入れ、併せて、432 名の修了者を輩出（現在も教育プログラム・コースを継続中の者がおり、途中経過の数値であることに留意）し、保健医療分野における AI 研究開発加速に向けた人材養成に大きく貢献した。

また、各大学の取組において以下の点は、大きな成果として評価できる。

- ① 当初の想定よりはるかに多く目標以上の受講生を受け入れていること、また社会への発信や成果の波及の取組についても十分になされていること
- ② 学術的活動を中心に、論文出版、特許、受賞、そして起業したものもあり、活発な事業が行われたこと
- ③ プログラム修了者が他大学の特任助教や海外の研究員などで活躍していること
- ④ オンデマンド講義、特別講義やデザイン思考の研修など多数の教材開発や活用が行われたこと
- ⑤ 本プログラムで同時に採択された 2 つの事業間で、ジャーナルクラブや合同シンポジウムの開催の連携がなされ、教育内容の拡充を図ったこと

なお、各取組により、養成人材の分野や事業計画、連携大学の有無、地域の実情等がそれぞれ異なることから、今回の評価は各取組の内容を比較して優劣をつけるものではなく、各取組が掲げた当初計画の実施結果や本事業の目標を達成できたか否かを評価したものであることに御留意いただきたい。

### 3. 事後評価を踏まえた課題と今後の期待

一方で、取組によっては例えば下記のような課題もある。

- ① 一部のコースにおいては、受講継続中の者を除いても受講者数に対する修了者数が低く、カリキュラムの見直しや実施体制、キャリアパスの構築について再検討が必要
- ② 連携大学の特徴と役割分担、具体的な連携実績が見えにくい

本事業の趣旨に沿った優れた人材を多数輩出するため、今後、各大学には、今回の事後評価結果における本委員会のコメントや、以下に記載の事項等を踏まえ、取組の一層の推進を期待する。

- ① 補助期間終了後においても、引き続き、本事業により構築された教育プログラムや他機関との協力関係を活かした医療人材の養成の一層の推進に努めること
- ② 大学間や企業との連携をはじめ、医療 AI 研究開発を加速するための取組を進め、社会実装の実現可能性を高めること
- ③ 国際展開やスタートアップ創出について、事業終了後も継続して取り組むこと
- ④ 本事業の成果であるオンデマンド講義などについては、可能なものは公開する等により広く一般に活用を図ること、また公表が困難であってもクローズドな形で他大学（特に医療系や工学系）でも活用可能な形で提供すること等により、広く活用する形とすることが望ましい（活用方法等については、文部科学省も必要に応じて事業者の相談に対応すること）

## 事後評価結果

### ○総合評価

評価	評価基準	件数
S	計画を超えた取組が行われ、当初目標を上回る成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。	1
A	計画どおりの取組が行われ、当初目標の成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。	1
B	おおむね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。	-
C	計画に沿った取組が行われておらず、十分な成果が得られているとは言えないことから、本事業の目的を達成できていないと評価できる。	-

「保健医療分野における AI 研究開発加速に向けた人材養成産学協働プロジェクト」の  
取組概要及び事後評価結果

整理番号	1
申請担当大学名 (連携大学名)	東北大学 (北海道大学、岡山大学) 計3大学
事業名称	「Global×Local な医療課題解決を目指した最先端 AI 研究開発」人材育成教育拠点
事業責任者	理事・副学長(広報・医療・共創戦略) 張替 秀郎
取組概要	
<p>我が国は高齢/高齢化社会、医療者の偏在、働き方改革など多くの医療課題が山積しそれらを克服する必要がある。それらに立ち向かうため、本プロジェクトは「地域ならではの豊富な医療課題をキュレーションし、AI 解決までをデザインできる人材を広く養成すること」を達成目標に掲げ、博士課程人材養成プログラムを全国各地の大学や研究機関、民間企業、自治体と連携し推進するものである。</p> <p>事業構想においては、トップエッジの高さと裾野の広さを強く意識し、AI 人材育成モデルを構築した。教育カリキュラムでは最先端 AI 研究開発に係る講義から始まり、医療現場での実課題に対しそれらの AI 知見を最適に活用する方法を身に着ける。東北大学を主幹に北海道大学と岡山大学が連携し、さらに各エリアの大学が協力することで「Global×Local な医療課題」解決能力を有する「最先端 AI 研究開発人材」を日本全国で数多く養成し、我が国日本の将来の発展に貢献する。</p>	
事後評価結果	
(総合評価)	S
計画を超えた取組が行われ、当初目標を上回る成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善を要する点等</p> <p>【優れた点等】</p> <p>○全体的に目標をはるかに超えた、素晴らしい成果が得られている。</p> <p>○300 を超えるオンデマンド講義、特別講義やデザイン思考の研修を行っている。東北大学で</p>	

は、初期AI研修、北海道大学では独自コンテンツや特別セミナー、岡山大学ではAI教育動画によるハンズオン講義や眼科領域研究、とそれぞれの特徴を活かした取組も行っている。

○学位取得 23 件、論文採択 70 件、そしてフォーラム参加者も 4,000 名を超え、目標以上の成果が達成できている。

○当初の想定よりはるかに多くの受講生を受け入れていること、また社会への発信や成果の波及の取組についても十分になされている点については高く評価できる。

○修了者実績は目標を下回ったが、コース修了は目標人数を大きく超えており、内容充実と効果的広報の結果と考える。

#### 【改善を要する点等】

●インテンシブコースにおいて、複数年度にわたる受講者もいるため、受講者数に対する修了者数が低いデータが提出されており、継続/離脱が分かりやすいデータの提出が必要。さらに今後は離脱した(修了できなかった)受講生の原因について、出欠状況やレポートの提出状況、ヒアリングを含む様々な観点から分析を行うとともに、本プログラムを既存の教育体制の一部として融合させるのであれば、カリキュラムの見直しや実施体制、キャリアパスの構築などについて検討し、コースの修了まで見届ける体制を構築する必要がある。

●企業との連携の実際、国際展開やスタートアップ創出は、事業後も継続して取り組むべき課題と考えられる。

●どのような地域医療課題における具体的な抽出内容があったのか、少々具体性に欠けるように思われ、それが社会実装の実現可能性があまり感じられなかった。その点を今後の課題にしていきたい。

●報告書からは複数の大学が密に連携しながら本事業を進めていたことが認められることから、今後も引き続き取組大学との密な連携、さらには医療 AI 研究開発を加速させるための取組を進めていきたい。

●事業内容は機械学習/強化学習等の内容が中心であり、生成 AI に関するものが乏しいため、事業継続にあたっては、進歩が著しい生成AIに関する内容も追加の上、実施していただきたい。

「保健医療分野における AI 研究開発加速に向けた人材養成産学協働プロジェクト」の  
取組概要及び事後評価結果

整理番号	2
申請担当大学名 (連携大学名)	名古屋大学 (岐阜大学、名古屋工業大学、名城大学) 計4大学
事業名称	メディカル AI 人材養成産学協働拠点
事業責任者	医学系研究科 教授 和氣 弘明
取組概要	
<p>東海国立大学機構の発足を皮切りに名古屋大学医学系研究科は保健学科改組、医療健康データ統合研究教育拠点・MIU 設置などの組織改革を断行し、情報学を研究教育の中心に置く戦略に大きく舵を切ってきた。</p> <p>本プログラムは、連携4大学と理化学研究所が行ってきたデータサイエンス教育を基盤とし AI 教育に主眼をおいたスタンダードコース、①ゲノム医療、②画像診断支援、③診断・治療支援、④医薬品開発、⑤介護・認知症、⑥手術支援の重点6領域に、⑦医療業務支援を加えた重点7領域において、現在22社と進めている AI 共同研究開発を OJT の場として活用し主体的に産学官連携 AI 開発を学ぶインテンシブ OJT コース、デザイン思考で患者・医療ニーズを探求するニーズドリブン AI 構築/アントレプレナーシップコースを設置する。現場ニーズに基づく AI 開発を産学官連携に展開し実臨床に活用できる AI 医療を構築できる人材育成を目指す。</p>	
事後評価結果	
(総合評価) A	
計画どおりの取組が行われ、当初目標の成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善を要する点等</p> <p>【優れた点等】</p> <p>○当初の想定より多くの受講生を受け入れていることに加え、社会への発信や成果の波及に関する取組についても十分になされていると考える。</p> <p>○期待されたレベルの成果は十分発出されている。</p> <p>○履修科目や AI ツールの記載がより具体的で最新 AI への対応も行っており、技術的な基盤構築を行っていたと考える。その成果の一つとして、各コースの受講が目標人数を大きく超えてお</p>	

り、学術的活動を中心に、論文出版、特許、受賞そして起業したものもあり、活発な事業が行われている。

○プログラム修了者は他大学の特任助教や海外の研究員などで活躍しており、本プログラムについては一定の効果があったと判断できる。

○多職種を対象にし、幅広い内容に取り組んでいる印象を受けた。これらが更に継続して発展することを期待したい。

#### 【改善を要する点等】

●一部のコースにおいて受講者数に対する修了者数が低い状況となっている。当該コースについては、修了できなかった受講生へのヒアリングの実施、出欠状況やレポートの提出状況の確認など、様々な観点から分析を行うとともに、今後の継続を見据えて、カリキュラム内容や実施体制の再検討が必要であると考ええる。

●複数の大学や地域自治体、企業が密に連携しながら本事業を進めていたことが認められるが、各連携大学の特徴と役割分担、具体的な連携実績が見えにくく、困難な課題である事業後の自走化の際の維持について工夫が必要と考える。今後も引き続き、取組大学との密な連携、さらには医療 AI 研究開発を加速させるための取組を進めていただきたい。

●GPU 等の整備により、内部環境で生成 AI 等を活用できると考えられることから、事業継続にあたっては、進歩が著しい生成 AI に関する内容も追加の上、実施していただきたい。

## 保健医療分野における AI 研究開発加速に向けた人材養成推進委員会委員名簿

※ 五十音順（敬称略）

かわなか ひろはる  
川中 普晴

三重大大学 大学院工学研究科 教授

ふくい つぐや  
福井 次矢

学校法人都築学園 日本薬科大学 学長

むらがき よしひろ  
村垣 善浩

神戸大学 大学院医学研究科 医療創成工学専攻 教授

やまぐち いくこ  
山口 育子

認定 NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長

計 4 名

（令和 8 年 1 月 30 日現在）